＜前回＞生命論の神学２

・現代における「生」概念と自然哲学（あるいは形而上学） → 「生命論の神学」の基礎
・生の現象学と生の次元
・神学体系内の「生」
　・本質と実存の混同（両義性） → 人間的な現実性
　・可能性から現実性への現実化（プロセス）
　　→ 中心、自己変化（異化）、自己同一性、自己への帰還
　　→ 生の機能：自己統合、自己創造（水平・前進）、自己超越（垂直、昇華）
　　→ 精神の次元における道徳、文化、宗教
・レベルと次元という二つのメタファー：実在の認知の問題
・諸次元の区別と統一性
　還元主義に対する全体論、二元論的分裂に対する統一論
・諸次元相互の関係性 → 次元の生成論（進化論＋可能性の現実化）
　次元の生成と創発性：可能性として存在していた次元の現実化
　システムにおける複雑度の増大から相転移へ、新しい秩序・法則の現実化

（１）健康と病の神学：多次元的な生

１．Self-integration and disintegration in general: health and disease
２．後期ティリッヒ（50 年代を中心に）：人間の病や健康の問題を様々な観点から検討。「キリスト論は救済論の一機能」であり（Tillich, 1957, 150）、「救済の本来の意味と我々の現在の状況のいずれの観点からしても、救済は〈癒し〉と解釈するのが適切であろう」（ibid., 166）。キリスト教思想の核心点は人間存在の癒しの問いである。
６．人間存在に関して身体的、心的、精神的の三つの領域が区別され、この人間存在の統一を指し示すものとして「人格」概念が位置づけられている（ibid., 47-48）。この議論の前提とされるのは、古代以来の身体、魂、精神（霊）という三区分的人間論（これは治療方法の三区分に対応する）である（ibid.,24-28）。

61 年の論文であり、そこにおいては、「物理的次元、化学的次元、生物学的次元、心理的次元、精神的次元、歴史的次元」という多次元の統一体としての生という理解が明確に表明され、それに基づいて、健康、病、治療についての次元論が示されるのである（Tillich,1961, 167-173）。

特定の次元に限定された「分離的治療」は医療行為としては不可避的であるが、人間存在の病とその癒しを全体として見たときに、癒しは他の諸次元の治療方法との共働を要求する（全体的治療）。

７．「人間イエスに適用されたこの神話論的象徴（普遍的治癒者の象徴。論者補足）がきわめて鮮明に示しているのは、宗教的なものと医学的なものとの統一性なのである。もし救済が癒しの意味で理解されるとするならば、宗教的なものと医学的なものとの間には対立ではなく、きわめて密接な関わりが存在しているのである」（ibid.,173）
９．イエスの宗教運動における病の癒やし。
12．モルトマンの健康論。
・Jürgen Moltmann, *Gott in der Schöpfung. Ökologische Schöpfungslehre*, Chr.Kaiser 1985, S.248-278. 』

健康の問題については、「健康は多次元的に捉えられねばならない」（Moltmann, 1985,

（２）遺伝子工学とキリスト教神学

１．遺伝子工学と「人間の条件」（アーレント）の変更可能性
なぜ、クローン技術の人間への適用が禁止されるべきなのか？

・人格の尊厳の侵害？
・神による創造への侵害（人間の越権行為）？
→　これらの論点は十分説得的か。罪とは何か。逸脱し肥大化した欲望。
↓
神の創造行為と進化あるいは科学技術との関係という問題に関連づけられる。
↓
２．フィリップ・ヘフナーの「創造された共同創造者」（the Created Co-Creator）。
人間は神の被造物であるが、神の行為が現実化することに自らの創造的な行為において共同する存在者、神の創造行為に参与する者である。この人間の行為には、科学技術が含まれる。
コール＝ターナーは、「創造された共同創造者」を遺伝子工学についての神学的議論において取り上げている。
「われわれは、科学技術を共同創造として、つまり、創造における人間の協力として考えるとの提案を考察することから始めたい」（Cole-Turner, 1993,　98）、「フィリップ・ヘフナーは、われわれが自らを創造された共同創造者と考えるべきであると論じている」（ibid., 100）、「科学と科学技術は神の持続的な創造的作業に仕えている。」（ibid., 101）
４．「創造された共同創造者」の問題点：
創造された共同創造者の議論の弱点の一つは、科学技術の両義性における影の面の理解が欠けていること＝楽観主義を指摘。
５．楽観主義の修正。
1）楽観主義を修正するキリスト教的な視点としての「贖い」。
神が毀損され苦悩する存在を救済する行為が贖いであるとすれば、この贖いに参与する人間の行為、たとえば、科学技術は罪、搾取、貪欲を楽観的に見逃しそれらを助長するのではなく、「苦しみ破壊されたものへ共感において応答する」（ibid., 101）ものとならねばならない。
神の創造行為に参与する科学技術：新しい存在形態を世界にもたらすプロセスを促進する。
神の贖いの行為に参与する科学技術：苦しむ存在（たとえば、自然環境）の苦痛を和らげる。
「科学技術は贖いと創造の関係性において見られねばならない」（ibid.）。
2）創造と共同創造に登場する隠喩表現についての議論。
現実の科学技術は多様であり、影の側面もさまざま。聖書における神は、農業と密接に関連した隠喩において表現されている。
隠喩表現は、単なる言葉の飾りではなく、むしろそれによって表現された事柄に価値と正当性を付与し、人間の行動に影響を及ぼす。神が農夫や園丁の行為（技術）を通して働くとすれば、その行為自体が神との関わりで価値あるものと見なされ、宗教的に正当な技術として承認されることになる。
６．個々の科学技術に対する評価あるいは関わりは、可能か。
現在のキリスト教思想が直面する問題状況。理論的な考察や分析の蓄積が現代のキリスト教思想には欠如している。自然科学・科学技術の問題を回避するキリスト教思想の伝統がもたらした現状。
20.「科学技術の神学」の手がかり、そして科学技術に対するキリスト教思想の関わりを責任あるものとする前提としての自然神学の再構築。たとえば、モルトマン『神学的思考の諸経験』。神学者と自然科学の対話の場（共通の場所）を構築する。

８．「宗教と科学」関係史１―聖書から古代

・「科学技術の神学」のキリスト教思想における基盤を求めて、関係史を振り返る。
・聖書から古代キリスト教：創造思想と知恵思想の意義と展開

８－１：聖書の創造論

・宇宙論的タイプの宗教→宇宙の存在という文脈における議論→始まり問題。
古代オリエントの宗教文化の共通性
cf. ギリシア哲学、仏教

１．第 1 創造物語：人間の固有性・独自性
定型句：「神はＡあれと言われた。するとそのようになった。神はＡを見て良しとされた」 → 創造の善性（有意味性）、創造（言葉・行為）→存在
２．被造物としての世界→世界の善性＝合理性
法則・理性
３．人間存在の意味：神の像（imago Dei） → 特殊な使命（支配？）
「ある」ということの意味、老いの意味、人間の価値は存在か、行為・能力か
↓
自らに与えられた理性（合理性）によって世界の合理性を解明する人間
科学技術の可能的基盤
４．第２創造物語：関係存在としての人間 → 知恵・耕す（科学技術）
パートナーとの関わりにおける人間（人間の社会性）
他の生命体との同質性・連帯性

＜関連テキスト＞

創世記１章

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が
水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。
4 神は光を見て、良しとされた。
27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造
された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。
海の魚。空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

創世記２章

7 主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れ
られた。人はこうして生きる者となった。8 主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自
ら形づくった人をそこに置かれた。
15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにさ
れた。16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。
17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしま
う。」18 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろ
う。」19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持
って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物
の名となった。20 人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に
合う助ける者は見つけることができなかった。21 主なる神はそこで、人を深い眠りに落
とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。22
そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところ
へ連れて来られると、23 人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉

の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。
25 人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。

８－２：創造から知恵思想へ

Ａ　知恵思想と科学

（１）成立の歴史的背景

１．旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉
　外典の知恵の書、シラ書（集会の書）
２．創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。
３．知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成、学校の知識人
　(1) 共同体の知恵（伝承）
　(2) 対外的な国際関係が要求する国際的な知恵
４．共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）
　因果応報原理の中心的な役割。
　箴言１章８節「わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。」
５．オリエントの知恵文学の伝統と「ヤハウェ信仰」の国際性

（２）ヘブライ的知恵文学の思想的特徴

①創造の知恵、あるいは知恵による創造
　世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」
　　知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言８章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。
②神の創造行為の探求と称賛としての科学　→　自然を通した神の讃美
　　→　自然神学（書物としての自然）
③「知恵のある生活」
　日常的な実践に関わる知恵に置かれている。箴言１４章などに見られる一連の対照（「神を畏れる―神に逆らう」→「知恵―無知」、「正しい―悪しき」、「謙虚―高慢」）からもわかるように、知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする実践的知恵、世代から世代へと伝承された知恵。共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。
④因果応報とその限界
　この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている。
「コヘレトの言葉」（「なんという空ししさ、なんとういう空しさ、すべては空しい」）
「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）

（３）創造から知恵思想へ

６．創造思想の発展＋転換：罪を前提とした創造の秩序。
７．創造の善性＋罪＝知恵の両義性。→　科学技術の原理的な両義性。原爆と原発。
　　→　科学技術を使う側の人間の知恵が問われる。
８．黙示終末的な宗教者イエスから、知恵の教師イエスへ。

＜聖書引用＞

１．箴言　1:7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る。8 わが子よ、父の諭しに聞き従え。母の教えをおろそかにするな。　8:22 主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしえの御業になお、先立って。23 永遠の昔、わたしは祝別されていた。太初、大地に先立って。

11:1 偽りの天秤を主はいとい／十全なおもり石を喜ばれる。2 高慢には軽蔑が伴い／謙遜には知恵が伴う。3 正しい人は自分の無垢に導かれ／裏切り者は自分の暴力に滅ぼさ　れる。4 怒りの日には、富は頼りにならない。慈善は死から救う。5 無垢な人の慈善は、　彼の道をまっすぐにする。神に逆らう者は、逆らいの罪によって倒される。9 神を無　視する者は口先で友人　を破滅に落とす。神に従う人は知識によって助け出される。

２．詩編　19:2 天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。3 昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。4 話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても 5 その響き　は全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

３．ヨハネ　3:2「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だ　れも行うことはできないからです。」

Ｂ　終末思想と科学

８．人間的努力の限界→神の世界への介入、超自然主義。未来の予測は科学？ モデル化とシミュレーションによって、人類は未来を支配できるか？

９．両義性の現実への回答としての希望（終末）の約束。

８－３：知恵思想の展開と無からの創造

＜創世記１＞　1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

１．ヘレニズム世界への展開　→　ヘレニズム文化との交渉・論争
　　論争の場としてのコスモロジー
　　プラトンの世界創世論（『ティマイオス』）
　　デミウルゴス、イデア界、素材、善

２．神・創造の善性と神の絶対性の強調：救済の確実性
　　→　神は何ものにも依存せずに世界を善なるものとして創造した
　　→　神のみが世界を支配する

３．「無からの創造」（creatio ex nihilo）の帰結
　(1) 悪の問題のアポリア　　(2) 世界の合理的秩序とその理解可能性
　　cf. プラトン主義の二世界論、グノーシス主義、マニ教
　↓
世界全体・現象世界を科学するということの動機付け
　世界のすみずみまで合理的な法則が行き渡っている。この合理的な法則は人間の理性によって理解できる。両者は共に、神の被造物だから。
　もし、反合理的な悪が世界を支配しているならば、世界を合理的に理解することはできない。

４．ロゴス・キリスト論、宇宙的キリスト

＜参考文献＞

１．M.ノート　『イスラエル史』日本基督教団出版局。
２．山我哲雄　『聖書時代史　旧約篇』岩波書店。
３．関根正雄　『古代イスラエルの思想家』講談社学術文庫。
４．関根清三　『旧約聖書の思想―― 24 の断章』岩波書店。
　　『旧約聖書と哲学――現代の問いの中の一神教』岩波書店。
５．フォン・ラート『イスラエルの知恵』日本基督教教団出版局。
６．並木浩一『旧約聖書における文化と人間』、『「ヨブ記」論集成』教文館。
７．芦名定道・小原克博『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。
８．芦名定道『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房。
９．『キリスト教思想史における存在論の問題　有賀鐵太郎著作集４』創文社。
　第二部　キリスト教における信仰と思想
　　第五章　無と創造
10．柴田有『教父ユスティノス――キリスト教哲学の源流』勁草書房。
11．Ben Witherington III, *Jesus the Sage. The Pilgrimage of Wisdom*, Fortress, 1994.